

リスボン国立図書館蔵 「中国語・ポルトガル語問答集」について

井 上 泰 山

1 はじめに

ポルトガルの首都リスボン市内にあるリスボン国立図書館を訪れたのは、2005年5月12日、木曜日のことであった。同日の午前中に先ず国立古文書館に立ち寄ってみたのだが、案内係にいろいろと質問する過程で、書籍媒体の漢字文献を一括して管理・保管している機関は国立図書館であるとの情報を得たため、古文書館での調査を打ち切り、ただちに同図書館へと向かった。幸い、国立図書館は古文書館から徒歩で10分程度の所にあり、新たに交通機関を利用する必要はない。

目的地へは容易にたどり着くことが出来た。早速入館し、身分証明書を提示して所定の手続きを終えると、臨時の利用者証が交付され、当日から一般閲覧者としての利用が可能となる。ただし、スペイン国立図書館と異なり、こちらは所定の利用料金を支払わなければならない。先ず1階のメインカウンターに設置されているレファレンスコーナーへと進み、司書を介して、所蔵漢籍の情報を得ようと試みたが、案の定、思うようにこちらの意図が伝わらない。というのも、書籍を特定して所蔵の有無を尋ねるならばともかく、何でもよいから、とにかく漢字で書かれている古い書籍を探し出してくれ、といった厄介な要求を突きつけてくる利用客は減多にいないからである。随分長い間パソコンの画面と格闘していた司書も、結局のところこちらの要求に応えることはできなかった。冊子媒体による漢籍目録も作成されていないことがわかった。私は少々

気落ちしてしまった。しかし、漢籍調査を目的としてポルトからコインブラを經由してわざわざリスボンまで乗り込んで来た以上、このままあっさり引き下がるわけにはいかない。気を取り直して再度自分で試してみることにした。ポルトガル語のできない身としては、たどたどしい英語に頼って、漢字で記された書物が所蔵されていないか、あの手この手で検索をかけてみたものの、やはり思うようにヒットしない。考えて見れば、専門家が行っても容易に成果が得られなかった作業に、素人が飛び入りで挑戦しても、おいそれと成果が上がるはずはないのである。

2 「中国語・ポルトガル語問答集」の概要

結局、漢籍そのものにはたどり着けなかったが、長時間に及ぶ悪戦苦闘の甲斐あってか、マイクロフィルムに収められたポルトガル語と中国語の辞書類が数種類あることがわかり、3階の専用カウンターに移動して、マイクロリーダーで内容を確認することになった。幸い、マイクロフィルムに収められた資料の情報については、専用カウンターに備え付けてあるカードボックスで検索することができる。紙媒体のカードならば、たとえポルトガル語であっても、既に一定の情報がカードに記載されているから、それ以上キーワードを入力する必要もない。時間さえかければ、その全てを点検し、必要な情報を収集することも可能である。早速、数箱分に収められたマイクロ情報カードを丹念に調査したところ、漢字を含む文献を3種類見つけることができた。そのうちの2つは漢字の字義と語彙の解説を中心とした辞書の類で、ポルトガル語と中国語、及び、ラテン語と中国語をそれぞれ対照させたものであったが、その他に、興味深い資料として、ポルトガル語と中国語の対訳問答集の存在を確認することができた。本稿では専ら、この問答集について、その概要を紹介することにした。

はじめに、書名と著者に関する情報を整理しておく。目録カードの記載によれば、この対話集の名称は“*Diálogos e frases em chinês e português*(中国語・ポルトガル語問答集)”であり、著者はGONSALVES, Pe. Joaquim Afonsoで

ある。しかし、本書のマイクロフィルムを収納したケースの表には、書名として“*GUIA DE CONVERSAC,ÃO PORTUGUÊS-CHINÊS*（ポルトガル語中国語会話指南）”とあり、同じく蓋の部分には「*AUTOGRAPHO DO SYNOLOGO PADRE GONZALVES*」との説明書きがある。そこには2004年11月5日の日付も記載されているが、これは恐らく本書がマイクロ化された日付を指すものと思われる。本書の正式な書名が何であるのか、いまひとつ明確でないが、全て手書きの原稿のまま保存されているところから考えると、正式な書名は付けられていなかった可能性もある。ここではとりあえず、目録カードの記載に従って、『中国語・ポルトガル語問答集』と呼ぶことにする。

カードに記載されている著者のゴンサルベスなる人物についての経歴や、問答集が作成された経緯などに関しては、残念ながら、現段階で開示しうる情報は無い。問答集の内容から判断する限りでは、かつてのポルトガルの植民地マカオで発生した大火災に関する比較的詳しい記述が含まれる他、中国の官僚機構を利用して巧みに利益を貪る人物とその具体的手口に関する言及が見られることなどから、マカオと何らかの関係をもった、ある程度の地位にあった人物のように思われるが、この点についてはあくまでも推測の域を出ない。今後更に調査を進めるつもりである。

次に、本文の形式と作成された時期についてであるが、本対話集は、ポルトガル語と中国語が、毎頁に左右対照形式で8行から10行にわたって対訳されている。全体の頁数は300頁にのぼり、156頁の途中までは、中国語の部分に発音記号も付されている。問答集の内容は51の項目に分類されており、項目別に、関連する用語、短文、あるいは想定される対話がアトランダムに例示されている。ただ、既述の如く、中国語の発音記号が全体の半分にしか付されていないことや、第51項の最後が中途半端な形で終了していることなどから考えると、本問答集は未完の作品である可能性が高い。何らかの事情により、完成半ばで執筆が中断されたものと思われる。

作成年代は特定できないものの、第127頁の対話の中に、「貴殿はいつお国を起たれましたか」という問いに対して、「嘉慶10年に出発しました」との返答

がみられることから、少なくとも嘉慶10年、乃ち1805年以降に書かれたものであることは間違いない。また、152頁に、広東総督が阿片の密売を禁止する旨の通達を出したとの記述が見えることから、阿片戦争前後の中国の世相を反映したものではないかと推測される。

本書の体裁について更に一点、補足すべき点がある。実は、問答集の直前に、42頁にわたる日常の慣用表現を例示した部分がある他、問答集の後ろにも、25頁にわたって、「俗語」という標題のもとに、諺と慣用句の類が箇条書きに列挙されている。いずれも当時常用されていた慣用表現を知る上で興味深い資料であるが、これらについては別に稿を起すこととし、本稿では考察の対象としない。

3 「中国語・ポルトガル語問答集」の分類項目

問答集の全体を俯瞰するために、先ず各項目の分類名称を原題によって示しておく。

- 1 【求】 2 【謝恩】 3 【說是・說不是】 4 【商量・思想】
- 5 【來往舉動等事】 6 【說話行爲】 7 【聽見】 8 【懂得】 9 【認得・記得】
- 10 【年幾・性命・死候】 11 分類名称記載なし 12 【天氣】 13 【時候】
- 14 【四時】 15 分類名称記載なし 16 【在學房】 17 【問好】 18 【睡覺】
- 19 【起來】 20 【穿衣裳】 21 【早上拜望朋友】 22 【吃點心】 23 【吃飯】
- 24 【嗑茶】 25 【說中國話】 26 【西洋人拜中國人】 27 【買書】 28 【賃房子】
- 29 【打聽一個人】 30 【新聞】 31 【寫書子】 32 【換東西】 33 【打獵・打魚】
- 34 【上船】 35 【下店】 36 【行路】 37 【裁縫】 38 【鞋匠】 39 【病人】
- 40 【看兩個婦人辯嘴】 41 【同知軍民府來會番差】 42 【管工程】 43 【農夫】
- 44 【作買賣】 45 【打架】 46 【當家】 47 【道理】 48 【光棍】 49 【教】
- 50 【買辦】 51 【堂官承差】

これらの項目が示すように、本問答集は、天候や時候の挨拶などの簡単な日

常会話に始まり、食事や睡眠、起床、あるいは、病氣、買い物、靴や衣服の修理、更には喧嘩、商売、道德、宗教に至るまで、およそ日常生活を営むために必要な対話が場面ごとに細かく例示されていることがわかる。項目を見る限りでは、本書は一見、ポルトガル人が中国に渡って現地で生活を営むために編纂された、実践的会話集のようにも見える。しかし、内容を仔細に検討してみると、本書が単に日常会話や旅行会話のための指南書を意図して編纂されたものでないことがわかる。というのも、一部の項目で展開されるやりとりについては、単なる語句の例示あるいは模範的対話の範疇を超えて、特定の人物による、具体的事実に関する一方的回想もしくは独白に近い形で進行し、その臨場感溢れる語り口は、読む者を思わずその世界に引き込んでしまう迫力をもっている。当事者以外の人物には語れないような特殊な手口を披露する場面もあれば、特定の職位にある人間でなければ到底思いつかないようなユニークな発想の開陳なども随所に見られる。問答集というよりも、あたかも一篇の小説を読むような趣が備わっているのである。

以下、展開される幾つかのやりとりを具体的に検討することによって、本対話集の魅力とその性格の一端を探ってみることにする。

4 「中国語・ポルトガル語問答集」の内容

(1) 「本を買う」

先ず、本の売買に関する対話を紹介しよう。本を買いたたこうとする客と、できるだけ高く売ろうとする店主との駆け引きの様子である。対話の内容から判断すると、この書店は常設のものでなく、路上で臨時に営業している店のようなものである。客は目当ての本を出させて、その瑕疵を見つけてはあれこれと難癖をつけ、何とか値引きさせようとするが、店主の方も強気で、そう簡単には応じない。二人の間に繰り広げられる丁々発止のやりとりは頗る臨場感に溢れ、あたかも実際にその場に居合わせているかのような錯覚を起こさせる。

以下に引用するのは、問答集第27、「本を買う（買書）」の全文である。原文に続いて筆者自身による日本語訳を丸括弧内に示す。原文の標点符号は筆者が

新たに加えたものである。[]内の数字は原文の頁数を示している。Aは客、Bは店主である。

A：[133] 你有賣的書么？（本はあるかい。）

B：有，無數的。（はい，沢山ございます。）

A：有那樣的書？（どんな本があるんだい。）

B：各樣都有。請你納說要什麼書。（いろいろとございますが，どんな本をお求めで。）

A：要詩經，四書五經。（『詩經』や四書五經の類がほしいんだが。）

B：有了。（はい，どうぞ。）

A：這個板不好，不清楚。還有錯的不少。（この版は良くないな。ほやけてるし，間違いも目立つ。）

B：[134] 這一部是藏板的，賤的。還有官板的，到底貴一點。（これは坊刻版でして，値段も安くございます。官刻もございますが，少々値がはりますよ。）

A：給我看一看。這一部印的可以真，到丁的沒有什麼好。再給我一部看。（ちょっと見せてくれ。印刷の具合はいいようだが，綴じ方がまずいな。他のを見せてくれ。）

B：再沒有。這一部好。（他にはございません。これがよろしゅうございます。）

A：好是好，但沒有註解小字。（いいのは確かだが，小字の註解がついてないな。）

B：噯呀，囉嗦。（なんともご注文の多いことで。）

A：是了。（その通りだ。）

B：[135] 我沒有好書給你賣。去別的舖子裡罷。我收起來我的書。（うちにはお売りできるような良い本はございませんから，他の店でどうぞ。もう片付けます。）

A：忍耐一點。再給我那一部。要多少錢。（まあ，そう言わずに。そっちのを買おう。いくらだい。）

B：要一兩六錢三分五厘四毫。（1兩6錢3分5厘4毫です。）

A：這個價錢太貴。這一部在人家的舖子裡不過值八錢。（そいつは高すぎるな。他の店なら８錢で買える。）

B：[136] 我不管人家賣多少。我賣的少久了本。（人がいくらで売ろうがこっちには関係ありません。こっちはもとで取るのがせいっぱいなんですから。）

A：我纔理會書皮不結實。書也切的不好。（今わかったんだが、表紙が弱いね。切り目も揃ってないし。）

B：罷了。你給我一兩零三分就是。（仕方ありませんね。１兩３分で結構です。）

A：我給你一兩銀子。不能多給。（１兩払おう。それ以上は出せないな。）

B：不能的事情。壞了本錢不少。（そんなご無体な。もとでも取れませんよ。）

A：難信。（そんなことはあるまい。）

B：看賬簿就信。[137] 我沒有多的話。要不要？（帳簿を見ていただければわかります。もうこれ以上申し上げることはございません。買うんですか、買わないんですか。）

A：不要拉倒。不買了。（引き倒すつもりかい。いらないよ。）

B：請了。噯，請回來。（ではどうぞおひきとりを。あの、もしもし。）

A：什么？（なんだい。）

B：因為我們相好，賣給他罷。雖然我吃點虧，沒有什麼拉人的法子。（これもよしみですから、お売りしましょう。手前の損にはなりますが、うまい手なんか使ってはおりませんよ。）

A：說什麼？（何か言ったか。）

B：不說什麼。我這裡有一本新書。[138] 保不定你喜歡。（いえ、何も。うちには新書がございますが、お気に召しますかどうか。）

A：什么書？（どんな本だい。）

B：藥書。（藥書でございます。）

A：什么名？（何と言う本だい。）

B：不記得。能勾看。（忘れました、ご覧ください。）

A：誰做的？（誰が書いたんだ。）

B：江南一个秀才姓陳的作的。(江南の書生で、陳と申すものです。)

A：我不要作大夫。不要他。你有笑書，曲子，對子，時憲么？(医者になる気はないから、要らないよ。笑話や歌や對聯，こよみなどはあるかい。)

B：過了三四天纔有，[139] 目下沒有。(4・5日したら入りますが、いまは切らしております。)

A：拿兩塊花錢。剩下的銀子找給我。(花錢を二つ渡すよ。つりをもらおうか。)

B：一塊錢換七錢五分。所要還你五分。(一塊錢は7錢5分ですから、5分のおつりでございます。)

A：是了。(よし。)

B：請了。(どうも。)

A：請。(いやいや。)

客は、店主が出してきた経書に対して、文字がはっきりしていない、注釈がついていない、表紙がしっかりしていない、装幀が悪い、などと次々に難癖をつけ、なんとか値下げさせようと試みる。これに対して、店主の方もあれこれと言い逃れをし、なかなか客の要求には応じない。しびれを切らした客は、結局本を買わずに立ち去るふりをし、店主も一旦はそれを放置するかに見える。しかし、そのままでは、せっかくのもうけを逃してしまうことになる。客の背中に一声かけて呼び戻すと、以前とは打って変わった態度で下手に出て、値下げを覚悟した上で再び本の売買をめぐる交渉を始める。店主の心を見透かした客は、言い値をさらに下回る価格でまんまと買い取りに成功する。

第137頁の中間にある「請了」までのやりとりと「噯請回來」以下のやりとりに場面上の転換が無いものとして考えると、およそ以上のような内容が浮かび上がってくる。ただ、「因爲我們相好，賣給他罷。」という言葉の発話者が誰であるのか今ひとつ明確でないため、やや不安が残るが、ここでは仮に店主の発言として考えておく。その場合、「賣給他」の「他」が「你」の誤記である可能性もある。そうでなければ、この場に店主と客以外にも第三者が居合わせることになって、話が複雑になってくる。

売り手と買い手との間に延々と繰り返される駆け引きは、150年前後の時間を隔てた今もなお、中国の至る所で見かけることのできる極ありふれた光景であり、些かも時間の隔たりを感じさせない。実際に現地を訪れて値引き交渉の極意を会得した人物、もしくはそうした環境の中で生まれ育った人物でなければ到底描けないリアルな描写である。

（２）「西洋人が中国人を訪問する」

次に、問答集第26の、「西洋人が中国人を訪問する（西洋人拜中國人）」と題する場面を取り上げてみよう。項目名が示すように、中国に渡った32歳の西洋人（対話の中で「老爺」と呼ばれる人物）が85歳になる老人を訪ね、道中の様子を老人に紹介するとともに、老人の住む村の様子についてもあれこれと質問する場面である。ここでは、一部のやりとりを抜粋して示すことにする。Aは中国人、Bは西洋人である。

A：[124] 老爺幾時到了？（いつお着きで。）

B：前日到了。（おととい着きました。）

A：[125] 一路平安。（よくぞ無事で。）

B：托頼你納的恩。（貴殿の仁徳のお陰です。）

A：老爺在廣東幾時起身？（廣東を起たれたのはいつですか。）

B：舊年十一月動身。（去年の11月に起ちました。）

A：爲什麼來的這麼遲？（どうしてそんなに時間がかかったのですか。）

B：路上遲緩了。（途中でぐずぐずしておりましたので。）

A：老爺走汀洲的路么？（汀州を通ってこられましたか。）

B：走了。（はい。）

A：在那裡住了幾天？（そこで何日間滞在されましたか。）

B：不過三四天。（3、4日です。）

B：[126] 沒有走那一條路。（そこは通っておりません。）

A：走什麼路呢？（ではどちらから。）

B：廣州府到贛洲，贛洲走南昌到這裡來。(広州府から贛州に至り，そこから南昌を経て参りました。)

A：這一条路更遠。(それは遠回りですな。)

B：雖然遠，到底便易一點耳。(遠回りでも却って楽ですから。)

A：爲什麼便易？(それはまたどうしてですか。)

B：汀洲來，要走七日旱路。南昌只有一天山路。(汀州を通れば陸路を7日，南昌からは山道を一日だけですみます。)

A：[127] 老爺是那一月裡在南昌開的船？(南昌から船に乗られたのはいつ頃ですか。)

B：上月初八開的。(先月の8日です。)

A：一路辛苦。(道中大変だったでしょう。)

B：不辛苦。(いえいえ。)

A：請問老爺貴庚？(お年は。)

B：今年三十二歲。(今年32歳になります。)

A：老爺離貴本國有幾年？(お国を離れてどのくらいになりますか。)

B：有四年。(4年です。)

A：老爺那一年起了身？(いつ頃起たれましたか。)

B：我是嘉慶十年起的身。(嘉慶10年に起ちました。)

A：老爺是過海路來的，[128] 是旱路來的？(海路でしたか陸路でしたか。)

B：是漂洋來的。(波に揺られて参りました。)

A：到貴國有幾年到了中國？(中国に來られてどのくらいになりますか。)

B：我到了有二年。(2年になります。)

A：同老爺有幾位來的？(ご一緒に見えた方は何人でしたか。)

B：有五个人。(5人です。)

A：都到中國來了么？(全員お着きになりましたか。)

B：除了一个在路上死了，別的都到了。(道中一人死んだ以外，他は皆着きました。)

B：[129] 你納貴姓？(お名前は。)

A：賤姓張。（張と申します。）

B：有多大年紀？（おいくつになられますか。）

A：有八十五歲。（85歳です。）

B：好高壽。（随分とご長命なことで。）

A：我老了，不中用。（老いぼれて何の役にも立ちません。）

……（中略）……

B：你是城裡的人？（城内の方ですか。）

A：不是。（いえ。）

B：你納在縣裡在鄉下？（街にお住まいですか、田舎にお住まいですか。）

A：我住在鄉下。（田舎に住んでおります。）

B：貴村叫什么？（何という村にお住まいですか。）

A：叫起口。（起口です。）

B：[131] 離縣有幾里路？（街から何里くらいですか。）

A：有二十里路。我是鄉下的人，所以沒有禮貌。（20里です。田舎者なので何の礼儀もわきまえておりません。）

B：不然。你很像京都裡的人。在你村庄裡有多少人？（いえいえ、都の方のようです。村にはどのくらいの人がおられますか。）

A：大小男女差不多有一百人。（女子供を含めて百人ほどおります。）

B：也有富貴的么？（裕福な方もおられますか。）

A：在鄉下那裡有富貴人。（田舎には裕福な者などおりません。）

B：我要回去了。我走了。（もう帰らねばなりません、おいとまします。）

A：[132] 還早。（まだ早いではありませんか。）

B：我趕住回去罷。（急いで帰らねばなりません。）

A：請了。我這幾天寔在忙，不回拜。（そうですか。このところ忙しくて御礼にも行けません。）

B：不敢勞駕。（ご足労には及びません。）

A：請了。送老爺。（それでは。お送りします。）

B：不敢當。你納在這裡。（とんでもありません。どうかそのままで。）

A：該當。豈有此理。（当然のことですから。それはいけません。）

B：你納在這理。（どうかそのままで。）

A：不送了。請了。（ではお言葉に甘えて。どうぞ。）

B：請了。（どうも。）

ここに登場する西洋人（ポルトガル人を想定すべきであろう）と老人の関係はいまひとつはっきりしない。訪問の目的も明確でない。ただ、対話の内容から推して、二人は旧知の間柄ではないように思われる。訪問する場所も、老人の郷里ではなく、仮住まいの居所のようである。旅先でたまたま面識を得、西洋人の方から中国人の居所を表敬訪問することになったのであろうか。

西洋人は老人に対して、祖国を出発してからの経緯について、一行 5 人で 4 年前に祖国を離れ、海路によって中国をめざし、途中で一人死亡した結果、結局、2 年前に 4 人で中国に着いた、と説明している。また、中国に入ってからこれまでにたどって来た経路を説明し、広州から「贛」乃ち現在の江西省を経て南昌に入り、その後船に乗って来た、と言っている。対話の中で、汀州を通って来たかという老人の問いに対して、西洋人がいったん肯定し、次に否定しているのは、一見矛盾するようにも思われるが、ここでは、質問に対する回答の可能性を両方示したものと考えておく。

中国に到着した時期、及び広州を起点としている点などを勘案すると、この西洋人は恐らくマカオに 2 年ほど滞在した後中国大陆に渡り、広州から江西省を辿って南昌までは陸路を、南昌からは水路によって、対話が交わされている場所までやって来たものと思われる。対話の場所を特定することは困難であるが、想定されているのは、江南地方のどこかの都市であろう。あるいは南京あたりかも知れない。

それはともかく、ここで注意しておくべきことは、老人の郷里に関して西洋人が発した質問の中に、村の人口や富裕層の有無に関する質問が含まれていることである。私見によれば、この質問は偶然に発せられたものではなく、あるひとつの明確な意図に基づいているように思われる。その意図とは、乃ち、布

教活動との関連である。ここに登場する西洋人に付与されるべきイメージとして、宣教師の布教活動を意識すべきではないかと思うのである。もちろん、この一事のみを以てただちに布教活動に結びつけることはあまりにも唐突に過ぎるであろう。この点は、更に詳しく検証する必要がある。

（３）「一家の主人」

これまで紹介した二つの場面は、いずれも日常生活の一部として通常展開されるやりとりに属するが、項目によっては、そうした日常会話の範疇から大きくはみ出した内容を持つ対話も見られる。次に紹介するのがそうしたものの典型的な例である。場面は問答集の第46、「一家の主人（当家）」と題する部分の冒頭の一部である。Aは聞き手、Bは主人である。

A：[241] 人常撞見不順心的事情。一時缺少一樣，一時那樣。一日沒有的吃，沒有的穿。一日少這個，沒那個。有時候一家子人害病生瘡出花。人細心的想多少不順的事情要悶死。我常心裡躊躇。[242] 在世上免不了要受苦。你忍受他，有功勞修德行。（人はなかなか思い通りにいかないもの。あれやこれやと事欠いてばかりで、食べ物が無い日もあれば、着る物が無い日もある。あれこれ足りないものばかり。家族が痼疾にかかることもある。いろいろ思い合わせると、思い通りにならないことばかりで、全く戸惑ってしまう。世の中には辛い事も多いが、我慢して徳を積むことです。）

B：我的敝氣狠不好。有時候生氣好咒罵。咒人家死人死兒女，火燒遭凶禍害瘟病，咒願兒女不死的老虎吃的，咒願自己不如早死了。（おいらの性格ときたら、全く最低で、時には怒って人を罵り、誰彼となく罵倒して、焼け出されてしまえとか、災難に遭うがいいとか、病気になっちまえとか、子供が虎に食われて死んじゃえとか、挙げ句の果てには、自分自身が早死にしまえとか、などと罵ることもある。）

A：這是從心裡惱恨發出來的。[243] 可見他的根子狠深狠堅固的。（それは全て心の中の怒りの気持ちが起こさせた事、心というのは奥深く頑ななも

のだということがおわかりでしょう。)

B：有一次，我同妻子嗑酒，母親來了。婦人說：便嗑點子酒，他就來了。他都藏起來了，把他老人家放在一边。我任憑他說，也沒有作声，不擋住他，到底心裡狠不喜歡。我父親有了病，命我請大夫去。[244] 我嘴裡答應，到底沒有去。至到他病的沉重，我着了忙，心裡着了急，請了医生，抓了藥給療調治，吃了兩劑藥就好了。因為我兌擲着買要緊的東西，隨大夫的話給他飲食，幾乎耽擱了他的性命，[245] 治不得了。(ある時，女房と酒を飲んでいて、母親がやって来た。女房が言うには、ちょっと酒でも飲もうと思ったのに、こんな時に来るんだから。そう言うと、女房は酒をみんな隠してしまつて、年寄りにはほったらかし。わしは女房の言いなりになつて声も出さなかつたし、それを止めもしなかつたが、いい気はしなかつた。父親が病氣になつて医者を呼んでくれと言つたけれど、わしは口ではわかつたと言いながら、呼びにはいかなかつた。病がひどくなつてから初めて、慌てて医者を呼んで処方させ、薬を飲ませたら良くなつた。肝心なものを買つて医者 of 言う通り食べさせたからよかつたようなものの、あやうく不治の病にさせて親父を死なせるところだつた。)

…… (中略) ……

B：[251] 我的婦人一連三胎生的都是女兒，到第四胎生下來又是一個女孩子。我受不得，不知不覺得說：生這麼些个女，要他作什麼。說這一句話，出街上去了。想不到婦人把女兒吻死了。你看這個關係有多大。你想想這個有多大關係。(わしの女房は立て続けに3人も女の子ばかり生みおつた。4人目に生まれたのは又しても女だつた。わしは我慢できずに、思わず言つたもんだ。そんなに女の子ばかり産んで、いったいどうするつもりだ。そう言つたまま、街に出かけちまつたが、あろうことか、女房のやつ、赤ん坊を食い殺してしまつた。なんともひどい話じゃありませんか。ねえ、そうでしょうが。)

A：[252] 一个人認心殺自己的兒女，不單算不得人，連牲口禽獸也不如。看豬狗下了仔子雖然多，他們不肯傷一个。就是老虎豺狼各樣利害的禽獸，他們

吃人、吃別の牲口、總説來不殺自己的仔子。（自分の子を殺すなんて、人間とは言えません。家畜や獣だってそんな事はしません。豚や犬は沢山子供を生むけれど、一匹も殺しはしません。虎やオオカミなどの獐猛な獣たちは、人も家畜も食うけれど、自分の子供を殺したりはしません。）

この項目については、発話者を特定しにくい部分が多く存在する。対話というよりも、独白に近い部分もある。従って、以上に示した訳文は、一つの可能性を考えて訳出したものに過ぎないが、仮にこのような形で対話が進行しているとすれば、二人の立場に関してある程度の推測が可能となる。

冒頭の部分で、まず、人生はままたぬ事ばかりで、病気や貧困に苦しめられる事も多いが、それに打ちひしがれることなく精進し徳を積むことの大切さが強調される。その後に続くのは、一人の人物の、過去に犯した数々の悪行と、それに対する自責の念である。嫁と姑の諍いを見て見ぬふりをしてやり過ぎふがいない自分の姿や、病気に罹った父親を放置して瀕死の状態に追いやってしまった事への反省、更には、4人目の女兒を出産した妻に悪態をついて取り返しのつかない結果を引き起こしてしまった事への後悔などが、次々に繰り出される。それに対して、聴き手は、冷静な態度で応対し、動物の子育てを引き合いに出して、主人に対して反省を促している。

ここまでくると、既に一般的な日常会話の範疇を大きく逸脱していることが明確になってくる。独白の内容やそれに対して発せられる聞き手の選び抜かれた言葉から判断すると、ここで交わされる会話の話者としては、過去の悪行を打ち明け懺悔する人物と、それを聴いて静かに諭す宣教師の姿を思い浮かべるのが最も適当であるように思われる。こうした仮定がどこまでの的を射ているかは、にわかには判定し難いものの、そのような関係を前提としてこの場面を考えると、話の推移がより明確に捉えられるように思われるのである。

この後、二人の対話は更に続き、最後の場面では、主人たる人物の資産状況に関する質問がなされ、金銭欲に取り憑かれることの愚かさや他人への慈悲心の尊さが強調される。「一家の主人」の項目の締めくくりの部分は以下のよう

なやりとりで終結する。

A：[254] 你家裡過得日子么？（お宅は暮らしていただけますか。）

B：家裡有一頃八十畝旱地，五十畝水地，二十畝園子，還開着一个糧食店。（うちには180ムーの畑と50ムーの水田，それに20ムーの菜園があります。穀物店もやっております。）

A：人來借貸，該當幫他一點半點耳。[255] 你有的多，多給些他，你有的少，少給些他。不要失他的指望。至少打發他幾句好話。那个人挨着餓，在一个狼窮窄的地步。你不可憐他。可見你的心腸狠硬。你有富餘原是爲幫人，並不是養你的慳吝。[256] 我不必引書上的憑據，這一條理很明白。你的心如鐵一樣硬，一點可憐人的心也沒有。你看財帛比你的心血還更重，去你一个大錢比割你身上一塊肉更□。急速改過罷。你積攢下的財物有什么用處？你革若熬煎一輩子作什么？（人が借りに来たら少しでも援助してあげるべきです。沢山あれば余計に，少ない時はそれなりに，援助の手をさしのべるべきです。彼らを失望させてはいけません。すくなくとも，やさしい言葉の一つもかけておやりなさい。その人は飢えに苦しみ，ひどく貧窮した状況の中にいます。哀れみの気持ちを持たないなんて，あなたはなんともひどい心の持ち主ですね。あなたが裕福なのは，本来人助けのためであって，あなた自身のケチな根性を養うためのものではありません。本に書いてあることを引用するまでもなく，この道理は明らかです。あなたはまるで鉄のような心の持ち主ですね。他人を哀れむ心など微塵も無いのですか。自分の心血よりも財産の方を重く見て，お金を払うことは体から肉を削がれるよりもつらいとでもいうのですか。ただちに悔い改めなさい。財産をため込んで一体何の役に立つのですか。一生涯あくせく過ごして何が面白いのですか。）

原文には一部不明瞭な文字や難解な語彙が存在するため，文意を完全には把握しにくいのであるが，概ね以上のような内容であると考えられる。ここに登

場する「一家の主人」は、一定程度の不動産を所有している他、穀物店をも営んでいることから考えると、かなり裕福な階層に属する人物である。にもかかわらず、この「主人」は他人に金銭的援助を与えることに消極的である。そんな「主人」に対して、聞き手は、他人に対して慈悲の心を以て接することの大切さを説き、金銭欲を棄てるよう諄々と論している。こうした口調が似合う人物として考えられるのは、先ず第一に、人の道を説く立場にある人物である。それは例えば私塾の教師であっても構わないが、これまで紹介した様々な状況を総合的に考え合わせると、「主人」を論す側の人物としては、布教活動に従事する宣教師をイメージするのが最も相応しいように思われるのである。

（４）「道理」

以上のような憶測を以て改めて本問答集を読み直してみると、そこに収められた様々な場面が新たな意味を帯びてくる。ここでは、項目第47の「道理」と題する部分の内容を抜粋して紹介してみよう。項目名として「道理」という言葉が選ばれること自体、既に通常の会話集の範疇を逸脱しているようにも思われるが、それはともかく、人としての道を守るためには、法律を遵守することは勿論、悪影響を及ぼす恐れのある書物も身辺から遠ざける必要があるとして、「毒藥」たる悪書の所有者に対してただちに廃棄するよう促している。最も興味深い事は、以下の対話の中に、明清二代を通じて常に禁書扱いされてきた『金瓶梅』や『西廂記』など、所謂「淫書」としての悪名高い小説や戯曲が名指しで登場することである。Aは聞き手、Bは告白する側の人間である。

A：[257] 人犯王法，給人家不好表樣。另外，還要受重罰。再沒有悖反國家的罪大。有人小心守他的財帛，生命到不小心。強盜歹人比老虎還利害。你若不趁早棄絕這個毛病，[258] 你肉身要受大害。人人都想世俗的光榮，肉身的自在，快樂。你要把功名放在前頭，失落功名，死也不敢。惡人遮掩他們的兇惡。他們作什麼，雖然說是爲你的便益，其實足爲的傷害。[259] 官差推官事忙，說時刻不能脫身。到底他們忙裡該偷閒察惡人。看小說金瓶梅，

西廂，鼓兒詞，小曲兒，本西洋景兒斜說的笑說，都是壞人心思的。聽說評話的，聽說像聲兒的，都是光棍的事情。你家裡的門，若關的嚴緊，賊一定進不去。[260] 若不謹守你的東西，難免失落他。不要撒村罵人。你的口該乾淨。略ヒの村粗的話，不該當出你的口。(法律を犯せば，人様に対して面目が立たないばかりか，重罰を受けなければなりません。国家に背くことほど重大な罪はありません。自分の財産を守ることに汲々とする余り，命をおろそかにする人もいます。強盗や悪人は虎よりも恐ろしいものです。もしあなたがその性癖を捨て去らなければ，身体に大きな害が及ぶことになるでしょう。人は誰しも，世俗の栄光と肉体の自由・安楽ばかりを追い求めています。功名を得ることを念頭に置き，それを失うことは死んでも承知しません。悪人は自分たちの凶悪さを隠すものです。彼らは口ではあなたの爲であると言うでしょうが，実際は傷つけようと狙っているのです。役人たちは公務で忙しいことを口実にしていつも体が空かないと言いますが，結局のところ，彼らは忙しくても暇を見つけて悪人を取り締まるべきです。小説『金瓶梅』や『西廂記』，端唄や小唄，それに西洋の様子を描いた笑話などは，どれもこれも，人心を破壊するものです。講談を聴いたり漫才を聴いたりするのは，忤ごろつきのすることです。家の門をしっかりと閉めておけば，賊は侵入してきません。もしも自分の物をしっかりと守らなければ，きっと失ってしまうでしょう。下品な言葉で他人を罵ってはいけません。口はきれいなままにしておくべきです。野卑な言葉を口にしてはなりません。)

B：我有一个冊頁，一个手卷。上頭寫的都是春宮耳，是人家的。(私は書画と卷物を一冊持っております。そこに描かれているのは，全て春画です。人様の物ですが。)

A：燒了他。不要還他。[261] 因爲這個算是毒藥。你幸而救了命。不要如今傷害別人。(焼き捨てなさい。返す必要はありません。それは所謂「毒藥」ですから。幸いあなたは命を救うことになるのです。他人を傷つけてはいけません。)

B：我不能作主。縱然我不還，要賠。（私の一存ではどうすることもできません。返さないにしても、少なくとも弁償しなければなりません。）

A：你賠他些錢。他也不能把你怎麼樣。你趁早收心改過，守本分作一个好人。（相手になにかしかのお金を払えば済むことです。そうすれば相手はあなたをどうすることもできないでしょう。一刻も早く前非を悔いて改心し、本分を守って立派な人間にならなければいけません。）

この部分にも難解な語彙があつて、内容を十分に把握しにくい部分がある。特に「本西洋景兒斜説的笑説」の部分がわかりにくく、句の切り方もこのままでよいのかどうか、不安が残る。ここでは、とりあえず、「笑説」を芸能ジャンルの一つと見なし、その前に列挙されている小説や端唄・小唄などと並列されたものと考えて訳出した。

対話の内容について検討してみると、ここでも聞き手は、世俗の功名心や金銭欲を断ち切って、悪の道に迷い込まないように諄々と諭す姿勢を前面に押し出している。最も興味深い点は、春画を所有していることを告白した人物に対して、それをただちに焼却処分するように命じるくだりである。告白する側の人物も、春画は自分のものではなく、人から借りただけであると言い訳するところなど、いかにも現実でありそうなやりとりである。小説や戯曲の作品を一方的に有害な書物と決めつけ、あくまで排除しようとするこうした態度は、明清時代の「士大夫」階級に属する人々の認識に通じるものがあるように思われる。その点から言えば、ここに登場する聞き手は、当時の統治者であっても構わないのであるが、私としてはやはり、ここでも布教活動との関連を視野に入れておくべきであると考え。というのは、淫欲を排除すべきものとして警戒する態度は、西洋の宗教においても共通するものだからである。「下品な言葉」や「野卑な言葉」を慎むように諭したり、「前非を悔いて立派な人間になるように」諫めるところなど、この勧告が宣教師によって発せられていると考えれば、二人のやりとりに対して、より明確なイメージが結べるように思われる。冒頭でいきなり展開される、聞き手の側の長い言葉も、それを一種の「説教」

として見ると、この場面がより現実味を帯びたものとして浮かび上がってくるのではあるまいか。

(5)「教え」

以上に紹介した幾つかの場面によって、本問答集の性格に関して一定の方向が見えてきたように思われる。そこに布教活動との関連を見いだすことにも、ある程度の合理性が認められるものと思われるが、そのことと関連して、問答集の第49に於いて、宗教そのものに関する興味深いやりとりが展開されているので、最後にその一段を紹介することにしよう。項目の名称は「教え（教）」である。Aは市民、Bは聞き手である。

A：[273] 有人説、天主教同佛教、天地會、白蓮教、天理教一樣、不過都是勸人學好。聽見説、天主教有患難的時候背教的多。(人の話によると、天主教は仏教や天地会や白蓮教や天理教などと同じで、やはり人によく学ぶように勧める教えだと。天主教は困難にぶつかると教えに背く者が大勢いるって話だが。)

B：有的。到底比不得別的教。教。沒有別的教多。(確かにいます。しかし、他の宗教とは比べものになりません。教義も他の教えのように多くはありません。)

A：[274] 昨日在廟裡作會。祭獻神，唱戲，燒香，燒紙，香蠟，門神，紙錢，掛錢，紙馬，元寶，都有。到底廟神沒有靈，所以我再不拜那人廟。(昨日は廟会だった。神様を祀って、芝居に焼香に紙焼き、蠟燭に門神に紙錢、掛け錢やら絵馬やら元宝やら、何でもあったね。でも結局何の御利益もありゃしない。だからおいらはあの廟にはお詣りしないんだ。)

B：和尚變什么？(和尚さんは何に変わるのですか。)

A：人説變驢。(人の話によると、驢馬に変わるそうだよ。)

B：道士子作什么？(道士は何をするのですか。)

A：[275] 他們愛辯論。(連中は議論好きで。)

B：妮姑子作什么？（尼さんは何をするのですか。）

A：管間事。有想命的，算命的，兩個人進來院子。一來就有人叫他們。在旁邊的人狠信服。說他們倒講得有理，樣乚都說着了，都算着了。老鴉叫，喜鵲叫，耳朵熱，眼跳，[276]都是不好的先兆。我不信這個。但人說不吉利的，我心裡就惡速。過年的時節燒松柏枝耳，門上插芝麻楷耳，清明帶柳圈耳，端午都帶艾，都是虛假的禮。（余計な世話ばかりしてますよ。運勢判断してもらう人と占い師とが二人で中庭に入ってくる。客が来ると誰かが連中を呼ぶんです。傍にいる人は心底信じ切っていて、連中の言うことは実に理に叶っていて、何でもかんでも当たらないものはない、みんなお見通しだって言うじゃあないか。鴉が啼いたり、鵲が啼いたり、耳たぶが熱くなったり、目がピクピクしたりしたら、そいつはみんな好くない事が起こる兆候だって話だ。おいらはそんなこと信じちゃいない。でも、みんなが不吉だと言えば、おいらもいい気はしない。年越しに松や柏の枝を焼いたり、門口にごまがらを掛けたり、清明節に柳の枝を着けたり、端午の節句によもぎを着けたりするのは、みんなうそっぱちの儀礼にすぎないね。）

B：自然。神主牌子寫的靈位神，怎么解説？（その通りです。お札に神様の像を描いたりするのはどういうわけですか。）

A：[277] 解説人的糊塗。所以我把他改成追思表。拜祖宗牌子是一件大禮。別的事情還躲得過，這一件事情很难。給人拜年弔孝是免不了的禮。（馬鹿な連中のする事です。だからおいらはそいつを先祖の顔に書き換えてやったんだ。先祖の位牌にお詣りするのは大事な儀礼です。他の事なら何とかやり過ごせるが、正月の挨拶と弔いだけはどうしてもはずすわけにはいかない。）

B：什么叫城隍土地？（城隍廟とか土地神とかいうのは何の事ですか。）

A：這些都是沒有來理的事。我母親自小就吃觀音齋。[278] 一日到晚，阿彌陀佛不離他的口。不能開他心改乚棄邪歸正。（そういったものは特に道理のあるものじゃありません。おいらのおっかあは小さい頃から観音様のお下がり食ってたもんです。朝から晩まで「南無阿彌陀仏」ばかり唱え

てた。どうしても心を開かせて邪宗を棄てさせることができなかった。)

B：你變法子勸他。與他相好的人，務必要勸他□他。(手を変えて勧めるべきです。親しい人を使って是非とも改心させるべきです。)

A：他執拗不聽。我有一个姨娘姓區。他們姊妹狠說得來。[279] 但我請他來家裡，他一定要帶來三四个女兒。這是四五口人的交果。我沒有這一種費用。(頑固なもので、どうしても聴く耳持たないんですよ。おいらには區という叔母がいて、母親と滅法気が合うもんだから、そいつに家へ来てもらおうとしたんですが、決まって四五人子供を連れてくるんで。そんなに來られた日にゃ、費用が嵩んでやりきれねえ。)

B：你不怕爲你的母親費用幾個錢。(母親のためなのですから、少しくらい出してもいいではありませんか。)

A：這樣少不了當上借上。有人拿一本時憲書揀好日子，有的看風水好不好，有的拆字。這些都是哄騙人錢的法子。[280] 我也都不信。(そうすると借り入れ覚悟でかからねば。中には暦を出して来て、風水がどうのこうの言ったり、八字の卦を気にしたりする連中もいるが、そんなもんはみんな騙して金を巻き上げるベテンにすぎねえ。おいらは全く信じちゃいない。)

この一段には特に難解な語彙が多く、上記のように一応日本語に訳出してみたものの、どこまで正しく解釈できているか、心許ない面が残る。また、話者の特定に関しても、果たしてこのような形で対話が進行しているのか、不安が残る部分もある。ここではあくまでも一つの試訳を提供したものと考えていただければ幸いであるが、それはひとまず措くとして、ここで次々に繰り出される質問を今一度振り返って見ると、それは主として廟会で行われる様々な行事に関するものであることがわかる。和尚や道士や尼姑について、彼らの果たす役割が何であるかを尋ねたり、城隍廟や土地神についてもその意味を質問したりしている。それに対して、答える側の人物は自分の身の回りにいる人間が行う動作を細かく説明するものの、自分自身はあからさまに不信の念を表明している。挙げ句の果てに自分の母親の行動まで引き合いに出して、民間に伝わ

る風習を一つ一つ否定していく。こうしたやりとりを見ると、この問答集が編纂された状況に関してある一つの方向を推定せざるを得ない。風習に関してあれこれ質問しているのは、恐らく中国人ではなく、布教活動を展開している宣教師であろう。中国の民間に伝わる伝統的な風習を迷信であるとして排除し、懐疑心を抱いている地元の市民に一刻も早く改心するよう勧める宣教師の姿を想定してこそ、この場面のやりとりがはっきりと理解できるのではあるまいか。

5 「中国語・ポルトガル語問答集」の性格と編纂の意図

以上に述べたように、清末の中国を舞台として繰り上げられる、日常の様々な場面を想定した対話からは、当時の中国社会の断面が生々しく伝わってくる。使用された語彙についても、近世白話の片鱗を伝えるものが多々あり、清末の言語資料として極めて貴重なものであると思われる。また、想定された個々の具体的な場所は特定できないものの、当時のポルトガル人の目に、清末の中国社会がどのように映っていたかを物語る貴重なデータにもなりうると考えられる。

また、取り上げた様々な場面によって、この問答集が元来いかなる経緯で編纂されたのか、という疑問に対してもある程度の解答を用意することが可能となってくる。既に予測したように、この問答集は、単なる日常会話指南書や中国大陸旅行用会話集を意図して編纂されたものではなく、編者が中国各地で接触した様々な中国人から実際に聴取した内容を書き取ったものではないかと思われるのである。項目によっては、実際にその職位にいなければ到底語れないような、職務上の機密に触れる恐れのある内容のものもあることは、その推測を裏付ける。

本問答集に関して現時点で考察し得た事柄は以上の通りである。編者の経歴や編纂の目的など、残された問題も数多くあるが、それらについては今後引き続いて検討することにした。また、本稿で取り上げた対話は、全体の分量から見るとほんの一部分に過ぎない。これらの他にも、例えばマカオで実際に起こった放火事件に関する取り調べの模様を描いた部分や、役人が自分の立場を

悪用して不正な利益を上げる様子を詳細に暴露した部分など、詳しく検討すべき興味深い項目も数多く存在している。こうした部分も含めて、本問答集の内容を今一度総合的に把握することによって、その本来の姿がより明確に浮かび上がってくるであろう。

既述の如く、本問答集はポルトガル語と中国語とを対照させて記述したものである。本来ならば、ポルトガル語の部分についてもその表現のあり方を検証し、どの程度正確に対訳されているか、時代的にはいつ頃のポルトガル語であるのか、といった角度からの検討も必要ではあるが、筆者の力量を超える作業を伴うため、ここでは断念せざるを得なかった。今後引き続き、専門家による研究が進められ、本書の持つ資料的価値がより一層明らかにされることを期待したい。なお、本問答集の全文（中国語部分の原文）については、本年秋口に公刊する拙著『漢籍西遊記』（関西大学出版部）の中に「資料集」の一部として掲載するので、そちらも併せて御覧いただければ幸いである。

（2008年3月8日 脱稿）